

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(四)

— 未来記・腰越・鞍馬出・馬揃・高館 —

服部 幸造

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(一) — 夜討曾我・

信田・十番切・大臣 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要

第9号 二〇〇〇年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) — 兵庫・はま出

・清重・俊寛・新曲・やしま — (名古屋市立大学人文社会学部研

究紀要 第10号 二〇〇一年三月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(三) — 安宅・一満箱

王・景清 — (名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 第11号 二

〇〇一年十一月)

(未来記)

さる間うし若殿。鞍馬のおく僧正がかけといふところへ。よなくく
よひ給ひけり。平家をせめん其ために。兵法稽古の嗜なり。抑兵法と
申は。三略のしつしよたり。むかし太唐しやうさんのそうけいが。つ
たえし秘書なり。吉備の大臣入唐し。八十四巻の中よりも。四拾二帖
に抜書て。わが朝へわたされしを。嵯峨の上のりじん。九年三月にな

名古屋市立大学研究紀要 12 二〇〇二年

らひ敵をしつめ給ふなり。さて其後に田村丸。十二ねん三月に習。な
ら坂山のかなつぶて。すゞか山の(1オ)

盗人。かゝるげきたうをたいらげ。天下をおさめ給ふなり。「サシイ

ロ」さて其後にすたり叡山にこめられしを。「コトハ」白河いんじの

このかうべ。ならふとは申せともさしたるゆふはなかりけり。さる間

うし若殿。たゝさんがくをはしりまはり。こぼくのえたをつたひ御身

をかるめ給ふ也。こゝに天狗共さしあつまつて。内儀評定する様は。

そもく当山此山は。慈覚大師の秘書として。行人ならてはこの山へ。

かよふ人もなかりしに。くらま寺のうし若か。我等かすみかをあざけ

る事。その(1ウ)

いはれなきものなり。いさや天狗の法罰あてんなんと申けり。愛宕

山の天狗。太郎坊申されけるは。そもく此兒ふやうにて。親にも

師にも不孝ならば。天狗の法罰あつへけれ共。父母教養のその為に。

平家をうたんと思ひたつ兵法けいこのたしなみなり。父母にきやうや

う有ものは。必天道の加護をかうむるなり。ばつし給はん宣儀こそ。

然べうもなしといふ。比良野の山の次郎坊。すゝみ出て申けるは。抑

我等か異名を天狗といふはいはれ(2オ)

あり。むかしは人にて候らひしか。仏法をよくならひ。我にましたる

智者なしと。大まんじんをおこすゆへ。仏にはならずして天狗道へ落

るなり。縦まんじん多くして。此道へおつるとも。情をいかてか知ら

さるへき。いさや丑若合力し。天狗のほうをゆるし。親のかたき討せ

ん。尤しかるへしとて。むねとの天狗七八人。若山伏に出たつて。丑

若殿のそばにゆき。いかに少人きこしめせ。抑此あたりに。人住所の候らへは。見くるしうは候らへ共。「カ、ルフシ」御出あつてし(2ウ)

はらく。「同」御あそび。候らへや少人とこそ。申けれ。丑若とのは聞し召し。是たゝものとおほさねと。なんの子細のあるへきと。思召れける程に。山伏のかたにのり。そこともしらぬ山をゆき。ふかき谷に分て入。いつくまでうし若を。ぐそくするぞあやしやと。おほし召れけるほとに。山のけしきと木の木立。がんれいがとそびへつゝ。万木枝を。ならへては花せうえんにさかんなり。りゝたる匂ひはかうばしく。しやうはくみとり色ふかし。瀧の音れいゝと。ひゞき(3オ)

岩間をくゞる音。是やまことにしやうれうぜん。きことくをんがとうたかはる。爰は本堂ならひにはいでん。玉をみがき。神殿に珠玉をかざり。九ぢうの塔は。雲にそびへ。坊中むねをならべつゝ。もんゝいらかをつゞけたり。かほとめてたき御寺の。此せんこくに有けりと。思召れ。ける程にしはらく立て。おはします。「コトハ」かゝりける処に。ある大坊のきやくでんに。むねとの大衆百人計。れんざして管絃かうのもてあそび。しやううちくきんぐご。けんくわんのしらべ(3ウ)

。面白かりける座敷なるか。うし若殿を見まいらせ。管絃をとゝめちやうしやう申。はるか座上にすゑまいらせ。山河のびしよくをとゝのへ。珍興をつくしてもてなし申。乱舞になれば天狗共。我おとらし

のくるひごと。てんこつのものゝ上手共か。むじんのきよくを尽しへて。我おとらしとそあそひける。老僧達申されけるは。あそび計てことゆくへきか。源平の合戦の。此末に有へきを。兼てしつて侍るなり。少人への御もてなしにまなふで御目にかけよといふ。承ると申て。ゆゝし(4オ)

げなる天狗か。是は平家の太将。安芸のかみ清盛と名のつてすゝみ出。あきの国敵嶋の明神の御はからひによりつゝ。此世を今よりおさむへし。平家に野心の者をは。都の内にはをくへからず。薩摩かたいわうか鳴へなかずへし。法皇をは。鳥羽の古京に籠奉り。清盛か子共いよゝ繁昌し。一門六十三人は。いづれも官録おもかるへし。嫡子次男は左右のたいしやう。孫は国わう。「カ、ルフシ」或は百官けいしやうなり。「同」あぶれ源氏の。末々を。種をたつてほろ(4ウ)

ぼすへし。南都にかたきか籠るとき。げきとこわくて。手にあまらは大仏。殿に火をかけよ。「ツメ同」承ると申て。ゆゝしげなる天狗か。本三位の中将。重衡と名のつて。三千余騎をそつし。南都へ押よせて。大仏殿を焼はらふ。春日のおとかめふかくして。すではや清盛は。火をやまうを請取て。せうねつ地獄のかなやのほむら。いかて是にまつさるへき。あらあつやかなしやと。こかれ死にそしんたりけると。か様に清盛のはや一期をかたつてさつと入。「コトハ」さて其後(5オ)

にゆゝしげなる天狗か。是は平家の世つぎ。右大将宗盛となつて。かふりそくたいのしやうぞくにて。ゆゝしげにてぎせられたり。ふし

きやないひじのみたれの時。伊豆の田中へ流されし。兵衛の佐頼朝世をみだり。いづの目代山木をうつて。相模の国石橋山に幡をなびかし楯をつく。大場の三郎押よせ。石橋山を追おとす。頼朝主従七騎にて。武蔵の国に落給ひ。国府のろくしよぶんはいにはたをなひかし。つゝくみかたを待給ふへに。たうこくさんへき弓取達。くつはみを双へ(5ウ)

はせつどふ。着到付て見給ふに。夜日三日の其内に。頼朝の御せい。廿八万七千余騎。はたの下に相なびき。先陣はさかみの国。小林の郷に京をたて。しん鎌倉とさゝめく。爰に信濃の住人に。木曾のくわんしや義仲は。平家を責んその為に。五万よきをそつしなのをたつて。越後の国府につき。越路にかゝり責上る。「ツメ同」都まぢかき越前のあふひうちか城に陣をとる。平家の人々肝をけし。おとろきさはき給ひて。十万余騎にて都をたつて(6オ)

。近江の国とかや。あらちをこえ。木のめ山を打過て。かへるの山に陣をとる。源氏はくつきやうの。城くわくにこもつて。さうなくおつましかりしを。ある人のたばかりにようこくのせきをやふられ。こらへかねておち給ふ。平家跡より責つゝく。加賀の国篠原あたかのたゝかひは天地もひゝく計なり。そこをも義仲打負て。加賀越中の国さかひあふくりから山に陣をとる。平の人々かつにのり。彼山へせめのほる。その時源氏の氏神。八幡大菩薩の。御はからひにより(6ウ)

つゝ。平家三万六千余騎は一夜か内にくりからの。谷の朽木とほろびはつ。平家にげてのほりしを。源氏あとより責かゝる。平家みやこを

おとされ。じんぎをとつてはるかなる福原の京へ落たまふ「コト

ハ」さる間義仲は。天下を守護し奉り。ゆゝしく見えて今ははや。きそのせいたうたるへきを。頼朝の果報におはれ。世をそむくへきずいさうあり。都の狼藉身にあまり。天下をなやましたまつる「サンイロ」平氏の逆心はさすか情の有つるに。あらうかりける(7オ)

かな源氏のげきふう。しかひに吹あれて雲のうへまで。波高し「コトハ」頼朝聞召れて。君をまほらん為にこそ。義仲都のしゆごとともあれ。かへつて天下をなやますは重てけうい成へし。其儀ならば討手を上せんとて。太将にはかはの御さうしより。此丑若殿元服し給ひて。九郎義経と名のるへし。うし若殿をは。鞍馬の多門伊勢の両社。守りしゆごし給ひて。弓矢の末をよに取たて。きんやうをあらはし。きゝうの家をつぐへきなり。是によつて(7ウ)

のりよしし経を両大将ときため「カ、ルフシ」都へ責て上るへし「同」むさんやな。義仲は。天下のにくまれてういのぼつ。弓箭の末も。すたれはて栗津かはらで。討るへし「ツメ同」義経都のけいごととして。さんじゆのじんぎことゆへなく。都へ返し申さんとて。みくさのとうげひよどりこえ。搦手をまはし責入へし。平家こらへで城を落。汀のみくづとなりはつる。終には西海の。あかまもしだんの浦はやともか沖にて。二位との先帝。宗盛をはしめ奉り。平家三万余騎は(8オ)

水の淡ときえはつへし「フシ同」さて其後に丑若との。兄にくまされ給ふなよ梶原に。心ゆるすへからず。兄弟の中ふわならは。其身の

運は。尽へきなり。六親不和にして三宝のかごは。よもあらし「ツメ同」爰まで末をはをしへぬ。さてそのうちを知らぬなり。是までしやうじまいらせて。対面申ししには。天狗の法をゆるすなり。是をまほりにかけよとて鉄の玉を取出し。うし若殿に参らせてかきけすやうに失ければ。ありし所は立うせて。僧正かかけなる(8ウ)
 なる。松のえたにそおはしけるさては天狗かうし若を。かどへけるよとおほしめし。洞幸坊へ帰らるゝ(9オ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(松)松村本、(慶)慶応大学伝小八郎本、(京)京大一本。

- 1オ ○平家をせめん其ために―(内)天下をおさめんすゝめに、(毛・慶・京)天下を納めん其為に ○嵯峨の上―(他本)坂のうへ
 ○敵をしつめ給ふなり―(慶・京)天下をおさめ給ふ
 1ウ ○盗人―(慶・京)たてゑぼし ○天下をおさめ給ふなり―(内・毛)天下をまほり給ひけり、(慶・京)国をおさめ給ふ ○このかうべ―(慶・京)ものども ○当山此山は―(内・毛・慶・京)当山は、(松)此山は
 2オ ○ものなり―(内・毛・慶・京)物を ○愛宕山の天狗太郎坊―(慶・京)ひえの山の大てんく ○申されけるは…比良野の山の次郎坊―(慶・京)ナシ ○平家をうたんと思ひたつ―(内

・毛)ナシ

- 2ウ ○我にましたる―(内)我より外に、(毛・松・慶・京)我より外の ○そばに―(内)所に、(毛・慶・京)前に ○見くるしうは候らへ共―(内・毛・慶・京)ナシ
 3ウ ○かざり―(内・毛・慶・京)つらね ○れんざして管絃かうのもてあそび―(慶・京)あながれ
 4オ ○くるひごと―(内・毛・慶・京)あそび事 ○あそひける―(内・毛)くるひける
 4ウ ○あきの国敵島の明神―(慶・京)敵島の明神 ○いよ／＼繁昌し―(慶・京)ナシ ○たいしやう―(内・毛・慶・京)大臣
 5オ ○ふかくして―(内・毛)こはくして ○さて其後に―(内)かゝりける所に
 5ウ ○なのつて―(慶・京)なのつてすゝみいで ○兵衛の佐頼朝―(他本)頼朝 ○相模の国―(慶・京)ナシ ○はたをなひかし―(慶・京)はたを靡せ楯をつき ○たうこくさんへき弓取達くつはみを双へはせつどふ―(内・毛)我も／＼とさんぜられけるを
 6オ ○夜日三日の其内に―(慶・京)ナシ ○しなのをたつて越後の国府につき―(内)信濃の国をうつたつて越後の府に着しかば、(毛)越後の府につき、(松)しな野国をうつたつてあちごのこぶにつき、(慶・京)しなのゝ国を打立て
 6ウ ○木のみ山を打過て―(内・毛・松)ちのみ山うちこへ、(慶・

京) 血のめやまうちこえ

7オ ○天下を守護し奉り―(慶・京) ナシ ○都の狼藉身にあまり

天下をなやましたてまつる―(内・毛・慶・京) ナシ

7ウ ○かはの御さうし―(他本) かばのくはんじや ○のりより―

(慶・京) ナシ ○弓矢の末をよに取たて―(内・毛) ナシ

8オ ○三万余騎―(他本) 三万六千余騎

9オ ○立うせて―(内・毛・慶・京) うちうせて

(腰越)

さる間判官とのおごる平家を三とせ三月にはろぼし。三種神器ことゆへなく二たひていとおさめ申。あまつさへ平家の太将大臣殿父子生捕。天下の御目かけ奉り。御身は六条堀河に。新造を作らせ。かくて爰に住給ひ。みかとをしゆごし給ふ。かの義経を見きく人。あつはれ弓矢の太将とほめぬ人こそなかりけれ。有時義経参内あつてそうし申されけるやうは。かのおゝいと申は。平家にとつても太将にて候らへは。みやこにて(10オ)

うしなはるべうもや候へき。又関東の頼朝に。一目御見せもや候へき。かやうに申候へははゞかり多くは候らへ共。ひとつには御朝敵。又は我等か家のかたきにて候らへは。恐れながら頼朝に。下し給はり候らは。家の面目たるへきよし奏し申されたりければ。みかとえいらんましゝて。実々申もことほりなり。さらは守護して下るへし。承る申て。彼大臣殿ふしをろうごしのせ奉り。手せいそろへて三百余

騎。都の内の神々にさまゝの御暇を申。殊更八幡(10ウ)

の御神は。当家弓矢のしゆごじんにて。めてたきしんにてましますと。

八幡のお山を伏拝み。五月七日の暁。あわた口をも打過 「サシクト

キ」大内山をくもぬのよそに詠こし。関の清水に着給ひ。大臣殿おも

ひつゝけて。かくはかり 「イロ」都をは。けふをかきりのせき水に。

又逢坂の。かけやうつさん 「コトハ」かやうにくちずさみ給ひ。さ

していそかぬ道なれ共駒もうちでのしゆくにつく。是や天智天皇の。

大和の国岡もとの京よりも此所にうつり。みや作りし給ひし(11オ)

。其旧跡をふし拝み。瀬田のから橋打渡り。のぢしのはらのしゆく過

て。曇りかゝらぬかゝみ山。其かみならの翁か 「サシクトキ」鏡山

いさ立よりみてゆかん。としへぬる身は老やしぬると。老をいとひ

てよみたりし 「フシ同」其いにしへの。言の葉まで思ひ。出しつゝ

哀なり。えち川渡れば衛なく。をのゝほそ道すりはり山。ばんばさめ

がいかしは原。をちこちの。たつきもしらぬ山中に。ふはの関屋の板

びさし。月もれとてやまばらなる。垂井のしゆくを打過(11ウ)

て。はやく熱田につき給ふ。かの明神と申は。かけまくもかたじけな

や。天照太神のその。ひとつにておはします。尾張第三の。宮とは申

なからも。をよそは。日本第三の。御神にてましますと。其時こそ。

大臣殿判官に。かたり給ひけり。何と鳴海と。聞からに。磯辺の波に

袖ぬらし。三河の国に入ぬれば。八橋にさしかかり。はしのふせむを

見給ふに。いさごにねふるえんなふは。夏を知らてさり。水にたてる

杜若は。ときをむかへて開けり。花はむかしを忘れず(12オ)

して。おなし色にそさきにける。はしもむかしの。名なれともいくたひか。渡しかへつらん。末をいつくと遠江。はまなの橋を見給ふに。南には海上。まん／＼としてきわもなし。北には又こすいあり。人家岸につらなつて。松ぶく風なみの音。いつれも。法のたくゐそと。打なかめ。下るほとに大井。川にもはや着ぬ。おゝいと御らんして。われ世か代にてありしとき亀山の。御幸の御供し。紅葉乱れてなかれ出し。清瀧川や。大井川思ひ出しつゝ忍はしや。うきしま(12ウ)か原よりも。富士の高根を見上れば。時知らぬ。雪の。色かのこまたらに降なして。麓にはとうざい江なかく。見えたる沼もあり。あしわけ舟に。さほさしてむれ入かもめの心のまゝに。かなたこなたへ飛さるを。浦山しくやおもはれけん。大臣殿。父子共に思ひ。つゝけてかくはかり。「サシ」塩路より。たえず思ひを。するかなる。身は浮島に。名をば富士の根。御子右衛門の督も。「イロ」我なれや。思ひにもゆるふじの。ねの。むなしき空の。煙計は。「フシ同」原には塩やの煙。へん／＼とし。風にまか(13オ)せて。行ゑも知らすまよへり。伊豆の三嶋に着給ふ。かの明神と申は。昔のうゐんか。苗代水とよみたりし。哥の道を納受しゑんかんの天より雨くたり。かれたる稲葉も忽に。みとりの色となりたりし。めてたきしんにてましますは頼もしく。思ひ申なり。来世にては必。九品の蓮台にむかへとらせ給へやと。きせひを申させ給ひつゝ。相模の国に入ぬれば。ぎけいの為に悦をきく川の宿と。打詠末は。さかわの宿につく。「コトハ」判官武蔵を召れ。案内をも申させて鎌倉入。ぶ(13

ウ)礼の至りと存するなり。飛脚を立て関東へあんなひを申へし。此儀尤然へしとて。伊勢の三郎義盛をもつて。かまくらへ案内を申されたり。頼朝聞召れて。「カ、ルツメ」扱はぎけいかさかわ迄。「同」下りけるかやめてたさよこの関東と申は。新造の所にて。見参所見くるし。見参所を作らせよ。わがるか津よりも。材木をあげさせよ。鍛冶番匠を揃へつゝいそげ／＼と仰けり。梶原承はつて。おつと答て御前を立て心の内におもふやう。浅ましや此君。在鎌倉ましますは。まつりごとしき(14オ)でう。たゝしく民のむね迄も。みな此君の御はからひと成へしさあらん時に梶原か。さかののいこん残りて。我々父子引出され。油井のはまにてきられん事はうたかひ更に有ましい。其儀にて有ならば。此君の御うわさを。あしきさまに申なし。先おつかへし奉り。より／＼ざんさう仕り。此君うしなひまいらせて。うき世の中にくらくくと。すまはやなんとおもひければあんしすまして梶原は又君のお前に参りけり。「コトハ」しやくとりなをし申。いかに我か君聞召れ候らへ。関東には君かくて御(14ウ)座有。都には義経の守護とまし／＼てこそ。御代はおさまり目出度候へきに。一円に関東に御ざ有ては。天下は誰か守護申さん。頼朝実もおほしめし。其儀にて有ならば大臣殿父子をば関東へうつし。ぎけいをは都へ上せよ。梶原思ふさまにしすまし。御前を罷立。土肥の次郎実平を近付。君よりの御意にて候。御身さかわへ打超。大臣殿父子

をばくわんとうへうつし申。ぎけいをは都へ上せお申候らへ。実平承り。あつはれ大事のお使かなと云まゝに。義盛と(15オ)

打つれ。さかわの宿に参り。判官の御まへにてしやく取なをし申。君よりの御意にて候。いしくも御下向候らひたり。関東のけいごにもすへ申たくは候らへとも。まことやうけ給はれは。けうとおんむのともがらが。あふ坂にかくれるて。世をみたらんとたくむよし風聞す。先々上洛候らひて。禁中のけいごましませとの。御使なりと申。ぎけいきこし召れて。いや／＼是は。頼朝の御返事とはおほえす。例の梶原めか。中にて申と心得たり。たゞ関東へをし(15ウ)

くたり。かち原父子かかうべをはね。此間の無念さをさんぜんとこそおほせけれ。実平うけたまはり。御錠尤にて候さりながら先大臣殿父子をは関東へうつしお申あり。しはらく逗留まし／＼て。重て注進ましまさば。実平かうて候うへは。よきやうに申へしと。とかくなため奉り。おゝいとの子うけとり関東へうつし申されたり。其後義経。又よし盛をもつて。土肥の次郎して申されけれども。是もかぢ原がちうにて心得。いそぎ上洛候らへと。申付て候に(16オ)

。逗留の次第心もとなく候。さりながら。此度のけじやうには。伊与の国一ヶこくを。申あづけ奉る。別たるちうのあらは。追而九国を御代官を。申あつてたてまつらんと。御返事なりと申てよし盛をかへす。「サシクトキ」よし盛やかて立かへりさかわのしゆくに参り。此よしかくと申ければ。義経きこしめされてこはいかにきそ義仲を。ちうりくせしよりこのかた。平家を三とせ三月にはほほし。三しゆのじ

んぎことゆへなく。二たひていとにおさめ申。あまつさへ平家の太将大臣殿(16ウ)

父子生捕。是迄下りたる義経に。いかにさんじんありとても。「フシ」一どの。対面はなとかなふて。有へきそ。是もおもへは。景時か。さんじんに。よるなれは頼朝にうらみ。更になし。「コトハ」さりながらまつたく不忠なきよしを。諸神諸社の牛王。法印の裏をもつて申されけれ共。是も梶原かさんさうによつて叶はず。義経無念におほしめし。一通の状をつかはし。返事にしたかひとまかくも。はからふへきにて侍るそ。それ／＼むさしと仰ければ。「カ、ルサシ」弁慶うけ給はり。墨摺なかし筆に染。草案までもなくし(17オ)

。たゞ一筆にぞ書たりける。「ヨミモノ」源の義経恐乍上候其意趣は。御代官の一ツに撰はれ。勅宣の御使とし。累代弓箭の芸をあらはし。会稽の恥辱を雪む。忠賞行なはるへき処に思ひの外に。虎口の讒言によつて。ばくたいの勲功をもたせらる。よしつねおかしなふして科をかうむる。こゝをもつてあやまりなしといへと。御かんぎをかうむる間空紅涙にしつむ。つら／＼。事の意をあんずるに讒者のじつふをたゞさす。くわん(17ウ)

とうへだも入られされは素意を述るにあたはず数日をくる。此時に当て恩顔を拝し申さずんば骨肉同体の儀絶。已に宿運きわまつてむなしきににたるか将又先世の業因を感じるか。悲しきかな此条古亡父尊靈再誕し給はすは。誰の人か愚意の悲歎を申披かん。何れの人か哀憐を垂んや。事新しき申状「同」述懐ににたりといへと。義経身軀髪

膚を。父母に受。莫太の時節を經すして古頭殿。御他界の(18オ)

のち孤と。成はてゝ母の。懐に抱かれ大和の国。宇多の郡に。趣しよ
り以来一日片時も案堵の思ひに住せず。甲斐なき命は存といへど。京
都の経廻難治の間。諸国を流行し。身を在々所々に隱辺土。遠国を栖
として土民。百姓等に服仕せらるしかるに幸慶。忽に純熟して平家の
一族。追討のために上洛せしむる。手合に木曾義仲戦誅の後平氏を。

ほろほさんために。ある時は峨々とする。岩石に駿馬に鞭を(18ウ)

打て。敵のためにいのちを。うしなはんことを。顧みず又あるときは。
漫々たる海中のうへにしてふうはのなんを凌ぎ。身を海底にしつめん
事を痛まず骸を。鯨鮓の腮にかく加之。甲冑を。枕とし。弓箭を業と
する本意。併。亡魂のいきとをりをやすめ申。年来のしゆくまうをと
げんと思ふより外他事なし。剩は義経。五位の尉に補任の条。当家の
ちやうぢよく。何事か是にしかん然といへど。今悲ふかうして歎切な
り。仏神のたすけ(19オ)

に。あらずより外他事なし。これによつて諸神諸社の牛王。法印の裏
をもつて野心を更にぞんぜぬ旨を。日本国中の。大小の神祇冥道を。
驚かしたてまつり数通の起請文をかきしんずといへど。なをもつて宥
免なしこの国は神国なり神は非礼を。うけ給ふへからすたのむところ。
他にあらずすなはち貴殿。広大の是非を仰き便宜を伺。高聞にたつし
秘計を。めくらされ誤なきむねを。ゆふざられ。芳免にあづからは。

積善(19ウ)

の余慶家門に及び永栄花を子孫につたへ仍。年来の愁眉をひらき一期

の。安寧をどくしゆせしめん事は尽す事の心を案するにこゝに津の国
渡辺にてさろだての遺恨によつて義経けいしか。中よからすやゝも
すれば便宜を伺。おりをえて。よし経をうたんとほつす。猶もつてか
なはされはのりよりの御手に付て先立て。関東に下着し。頼朝に近つ
き。たてまつりよりく。ざんさうをいたす所。そのいはれなきもの
なり。ほんく(20オ)

つみの。うたかひをはかるくするともむしつ(20ウ)の。うたかひをは
をもくせよりは万民のよろこひ非は又諸人の。歎たり賢王は一心のた
めに。りをまげず先車の。くつかへすを見て。後車おそれをなせり。
かみすなをなれば。しも安し。水上すまされはかりうによつて。月や
とらすなんそ梶原。一人に諸国の諸侍をおもひ。かへられんよりいそ
ぎ。遠嶋にはゆうせられ諸家のなけきをやめちうきんのいさみをなし
給へ。せいくわうせいきうつしんでまふす(20ウ)

。元暦二年六月五日進上因幡の頭殿へ。よしつね判と書たる。彼弁慶
かひつせい。ほめぬ人こそなかりけり(21オ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利
家本、(打)打波本、(東)東大本、(直)直熊本

10ウ ○関東の―(東)とうごくの ○三百余騎―(内・毛・打・
直)二百余騎

13オ ○御子右衛門の督も―(打) 御子右衛門のかみも〔ミセケチ。

〔清むねも〕ト傍書]

14オ ○関東へ―(内・毛・打・直) かまくらへ ○関東と申は―

(内・毛・打・直) 鎌倉と申は

14ウ ○其儀にて有ならば―(打) ナシ ○しやくとりなをし申―

(内・直) 君の御前にかしこまり、(毛・東) ナシ ○関東には―

(内・打・東・直) 東国には

15オ ○関東に―(内・直) 鎌倉に ○実もおほしめし―(内・毛

・直) 聞しめされてけに―是はいはれたり、(打) きこし召てけ

に―是はいわれたり〔けに―是はいわれたり〕ヨミセケチ〕

○関東へ―(内・毛・打・直) 鎌倉へ ○御前を罷立―(毛)

ナシ ○くわんとうへ―(内・毛・打・直) 鎌倉へ

15ウ ○関東の―(直) 鎌倉の ○まことやうけ給はれは―(他本)

まことやらん ○ぎけい―(内・毛) 判官 ○関東へ―(内・打

・直) 鎌倉へ、(毛) 鎌倉に

16オ ○をは関東へ―(内・毛・打・直) をは鎌倉へ ○とり関東へ

―(内・毛・打・直) とり鎌倉へ

17オ ○おほしめし―(毛) おほしめし其義にて有ならば ○つかは

し―(内・毛・打・東) 遣し頼朝の御目につかけ、(直) こしらへ

17ウ ○くわんとうへ―(内・毛・打・直) 鎌倉へ

(鞍馬出)

去問六はらの御所には。うし若とのゝ悪行の身にあると聞しめし。御

一もんさしあつまり。彼人おいたつものならば。当家のゆゝしき大事

たるへし。討てすつるか。忍て流すかなんと評定ある〔サシクト

キ〕母の常繁はきこしめし。有にあらぬ御身にて。忍ひて文をあそ

はし。丑若とのに告給ふ。丑若文を御らんして。か様に母の御手より。

文を給はりいつくの国。たれやの人を頼て。下るへしとも。覚すや

〔コトハ〕所詮うし若。御本尊より外。頼み申かたも(1オ)

なしと〔サシイロ〕高堂に参り夜とともきせひを申されたり

〔ク〕抑毘沙門と申は。四天の中の第一に。八天堂の尊社たり

〔サ〕仏法ごちの其為に。弓箭を守り給ふなり。うし若か一期の本望は。

身のためおこすむほんならず。父母教養のそのために。平家をうたん

と思ひ立。兵法稽古の嗜なり

〔コトハ〕多門の十種の福をは。父母

教養せんものにあたへんといへるちかひなり

〔クトキ〕ほんせい今

にたかはすは。丑若にこそたぶべけれと。ふかくきせい(1ウ)

を申。打まどろみたる御夢に。白きうさぎと鼠とが。袂に入と御覽し

て。打驚き。おほしめす

〔フシ同〕兎は東の物。鼠は北の生もの也。

東北の。すみをは丑刀とこそ名付たれ。いしやな天と申は。此方にお

はします。かるか故に。名付つゝ多門天と申也。毘沙門の栖をは。べ

いしらまなやじやうとて。よねのふる都也。如何様も丑若は。丑寅の

かたに立越て。よに出よとの自現かや。あらふしきやな北と。東の相

には。誰やの人を頼みて。下るへしとも。覚すとまだいとけなき。御

こゝろにつく(2オ)

く〜と案し給ひけり。「コトハ」すでに天晴。まだ早朝の事なるに。道者四五人にうだうす。そんじやおほしきおとこの。四十計に見えけるか。有徳の人とおほしくて。御はちにかかねをまき入。三度の禮拜参らせ。じゆずさら〜とおしもんで。千五百里の道のあいだを。あんをんにまほり給へと。ふかくきせいを申さる。そのうちかうしの内よりも。五十余りなる僧出て。御道者はいつくの人ぞ。態とのへ参りかひんきさうか。いやこれは。ひんぎなからわさとのへ参りて候。そはなる法師これを聞。御へん(2ウ)

はいまた見しらぬか。あれこそいまにはしめぬ。三条金子あきんどの吉次殿よと云ければ。あふさる事あり。奥よりはいつの比の御上りそ。去年の冬籠上りて候か。余寒やう〜打とけば。此間にまかり下り候へし。さもあれ音にうけ給はる。秀平殿と申は。いかなる人のぶげんの人さうぞ。ひでひら殿と申は。五拾四郡のさうすいふくし。白河の関よりも。ひかしは残る所もまします。さいちやう国民相隨ひ。せいを持事は其数を(3オ)

しらす。日本半国より。猶多きぶげんとこそ承はれ。さて其人は。奥州の住人か。いや都の人と承る。一とせ源氏の御太将。八幡殿と申せしが。おくへ下らせ給ひ。さだたうむねたう。やすたうをたいらげ。御上洛の御時。奥州の守護代をかの元平にくだした。五十四郡の国人は。みな元平に思ひつく。こわきをやはらげよわきをなて。「カ、ルツメ」たみをあはれみまつりごと。「同」古法に任て取おこなふ。国のなびき随ふ事は。草木の風になひくかごと(3ウ)

くなり。かくておくをしつめつ。秀平殿の代々は。吹風もこゑをとめ立波も岸をあらはず。よき太将と承る。秀平殿と申は。俗生よき侍にて。くにをもよく治め給ふ七珍万宝あきみちてたうちやうじやの位と申なり。「コトハ」丑若殿は聞し召。これはた〜多門のたくせんや。秀平は先祖の家人。たのみ下る物ならば。情なくはよもあらし。吉次を頼み道つれし。下らはやと思召し。吉次とふかく約束をめされ。「サシトキ」洞幸坊におかへりあり。常の(4オ)

所に御入あつて。旅のいで立し給ふに涙もさらにせきあへす。いつも御身をはなされぬ。こんねんどうの腰のもの。金子作りの御はかせ。これそ忍ひて。もたれたる。めしつかはれしわらはの。あいずりのひた〜れに。御身の召れたるせいがうの大口を。ぬぎかへさせ給ひ。御ぐしからはに高くわげ。七歳の御年より。「フシ同」住なれさせ給ひたる。洞幸坊を。た〜一人さよに。紛て。出給ふ。さすがに御寺の御名こり。かたへの児たちこじ同宿の名残共。あひねんふかき人(4ウ)

多し。未来をかけて契りし者。今も知らせて有ならば。前後をしゆごし。行へけれ共人めを。しのぶ旅なればた〜一人そ。御出ある心さしこそ。哀なれ。「イロ」師匠に名残のおしければ。形見の為と思召し一首の哥をそ。残されたる。「サシ」思ひきや。身をおく山に。住おして。このみひとつに。成行んとは。「クトキ」かやうに詠し給ひつ。庭の名木石共を。いつの世にかは立帰り。又みんすらん。あちきなや。「フシ同」桃李ものいはねば我が出ぬるを。よも告し。梅

けいせつを(5才)

ふくめ共。など晝をしらせぬそ。さて本坊を立出て。地主権現ふしお
かみ。あか井の水も。さえくもりかげ。さへやとす月もなし。七つに
まかる鞍馬坂。夜更て物うき道のべを。貴布祢の神の。社こそけに。
頼もしく。聞えけれ。名残そおしき市原の。たちとまりて。みそち
池ちはやふるらん。かみかもの。道をたすの森過て。夜はほのく
としら川や。吉次に今もあわた口。はやまつ坂に。丑若殿ほと。なく
つかせ。給ひけり。「コトハ」待吉次は見えずして。美濃(5ウ)

の国の住人関原の与一。おうばんを請とつて。夜を日についで上りし
が。其夜は大津にとまり。松阪のあたりにて丑若殿に参り逢。うし若
殿は御らんして。源氏のものへの門出に。平家の郎等にあふ所は無念
也。きやつに見あひ。都に披露せさせては。あしかりなんとおほしめ
し。扇をかさし。あみ笠をかたふけさらぬ躰にてお通りある。与一か
馬と申は。明六さいの野取の駒。ものを見てはきれやすし。宵にふつ
たる雨水の。道にたまりて有けるを(6才)

。そゝろにけあげける間。丑若殿の直垂はたしほる計にぬれにけり。
丑若殿は御らんして駒の足たちしとろ也。あしくも行あひけるやと。
そなたも見すにげ給ふ。与一らくにはこつて。にぐる心のいたいけさ
に。手綱もとらでけかけたり。丑若殿は御らんして。なふ。然へくは
御馬を。しつかにうたせ給へや。手綱にあまらはその馬を。捨てお通
り候へや。我等かやうなるわらんへこそ。けあげの水をいとはず共。
都方の弓取の。とかむる方も候へし。あつたら馬をすてうよりおりて

引(6ウ)

との御説也。与一無念の詞をき。こほどのものにあてられ。返事を
せぬ物ならば。京田舎の物笑と成へし。又さらぬていにて通りたらは。
さして難にも成まじきを。あれほとわらんべ。あつれば路次の狼藉
あてねは時の辱恥。太刀のむねにて打ふせておいうしなへと下知をす
る。承ると申て。若堂三人中間六人。上下に九人の者共か。太刀長刀
のさやをはつし。こゑ計にておどさんとて。おれはくそおとしけ
る。うし若との御覧して。をのれらか有様は。いなりまつりか祇園
(7才)

のゑか。かものまつりの物まねか。「ツメ同」具足に風をひかせんと
や。をそろしうもないそとてからくそ笑ひける。与一此由きくよ
りも。にくいやつか詞かな。具足よごしに切はしするな太刀のむねに
て打ふせて。追失へと下知をする。承候とて。まん中に取こむる。う
し若殿は御らんして。僧正かかけにて。ならばせ給ひし天狗のほう。
出あふ所と思めし。御はかせするりと抜て。まつかうにさしかざし。
大せいの中へわつて入。むかふものをおかみきり。めてへまはるは車
切。弓手にきれてひだり太刀。よせて(7ウ)

返すはさく波きり。梢をもむは嵐切。天狗たをしの笑ひ切。爰はと思
ふ秘事の手をは残さすこそはあそはしけれ。丑若殿の御はかせ。ひら
めくと見えしかは。手うらいまだ返さぬまに。六人しんで三人はいた
でおふてぞひれふしける。与一此由見るよりも。あれ程のわらんべ。
縦ば十四か十五かに。いかほとあまらじ。手なみみせんと云まゝに。

八郎本

駒かけよせてちやうとうつ。丑若殿は御覽して。きやつは日本一番の。おこの者にてありけるや。ちきに切て捨ては。思出のあらはこそ。なぶり(8オ)

きりにきやつをして。あそばばやと思召しうけ太刀になつてそまはりける。与一此由見るよりもされはこそ此わつはは。にげて行か。いづく迄にかさんとなげかけく切たりけり。丑若殿は御らんして。いつ迄きやつを。なふるへきと思召し。弓手にきれてかひ違ひ。与一か馬のさんづを。ひらき打にちやうどうつ馬はうたれてはねければ。鞍玉にとられて。まつさかさまにどうとおつるおきんくとする所を。はしりかゝつてかかつてむね打にちやうくとうつたりける(8ウ)

〔片ツメ同〕 少もくほき所にて。雨水にぬれにけり。丑若殿は御らんして。もつたひも候らはす。児と女には。御めんぎふかや。馬よりおるゝいんきんさよ。お伴の者は。いつくに有そ。あの馬引て。与一殿をのせ申せ。それくと有しかと返事するものなかりけり。丑若馬を引よせ。是に召れ候て。御帰候らへや与一殿と有しかは与一あまりの恥しさに。馬も下人もふり捨山しな寺のかたはらにふかく忍ぶでゐたりけり。それよりもみなもとおくへ下らせ給ひて。天下をおさめ給ひけり(9オ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(打)打波本、(東)東大本、(松)松村本、(慶)慶応大学伝小

- 1オ ○去間―(内・毛・打・慶) さまざま ○身にある―(松) 身にある「[ま]ト傍書」 ○さしあつまり―(内・毛・打・慶) さしあつまつて御評定はとりくなり ○討てすつる―(慶) きつてすつる
- 1ウ ○参り―(内・毛・打) お参り有 ○せんものに―(東) ナシ
- 2ウ ○四十計に見えけるか―(内・毛) ナシ ○有徳の人とおほしくて―(慶) ナシ ○三度の礼拝参らせ―(内・毛・打) ナシ ○五十余りなる僧―(慶) 御僧 ○いやこれは―(内・東・松) いや
- 3オ ○いまにはしめぬ―(内・毛・打) 都に隠れもなき ○さる事あり―(内・毛・打) さる事あり珍しや ○いかなる人の―(他本) いか程の
- 3ウ ○おくへ下らせ給ひ―(毛・慶) 奥をせめさせ玉い
- 4オ ○しつめつ―(他本) 納めつ ○よき侍にて―(他本) よき人
- 4ウ ○こんねんどうの腰のもの金子作りの御はかせ―(内・毛・慶) 金作りの御帯刀こんねんどうの腰の物
- 5オ ○思ひきや身を…かやうに詠し給ひつ―(慶) ナシ
- 6オ ○きやつに―(他本) いかさまきやつに
- 6ウ ○手綱にあまらはその馬を…とかむる方も候へし―(内・毛・

打)我等かやうなるわらんべこそけあげの水をはいとはずとも都方の弓取のとがむる方も候べし手綱にあまらは其馬を捨ておとをり候へ

7オ ○成ましきを―(内)成ましきを運のきわめのかなしさは
7ウ ○まつかうに―(内・毛)みつげんに
8オ ○あそはしけれ―(内・毛・打・慶)つかはれけれ
9オ ○みなもと―(内・毛・打・慶)牛若殿

(馬揃)

さる間頼朝盛長を召れ。此間の事ともは夢うつゝの吉事。文学の占のさす所。天命爰にしよかんして。果報の花のつほみ出。匂ひかつがふ風情なり。めいむと占かたも。すてに漸々時をうくる。いそぎ廻文をまはし頼ふて見んとの御詫なり。盛長承り。誰々と申共。寿命めてたき人なればとて。三浦の館にそ付にける。彼三うらの大介義明は。とし積りて百六つになられしか。君の御判と承り。うち冠烏帽子き。直垂ひぼつがい。机(10オ)

に置いて拜み。孫嫡子の和田の義盛。おうたうの彦太郎をひそかに召れ。是々拜み申せ。先祖の君の御判を。いたゞけ子共孫共。祈にも明もんにも。又は後生のうつたひにも成へきぞ。「サシイロ」されはしんほうけん翁は。うんなんのろすいをのかれんとて。大石によせてひぢをおる。たいこう坊といつ人は。いひんの波に釣をたるゝ。へうたんしばくむなしく。草がねんかちまたにしげし。れいぢやうふかく

とぎす。雨げんけんかとほそを。「フシ同」うるほすか(10ウ)

ことくなり。されはくつげんは。世のうき事を恨つゝ。草の庵に身をかくし。昔を忍ひ老にけり。よし明も人ならば。山にもこもるへけれ共。此老かみに積る雪。わか身ひとつに取なして。よるへも。しらぬ沖のなみ。うら嶋か。玉手箱あけ。てもいとゝ。くやしき。「コトハ」かゝる目度主君の。御判を拜む事共は。一眼の亀のたまさかに浮木にあへることし。とうく領定申せ。承ると申て。三浦三百五十三騎。長帳に判をすゑ君に頼まれ奉る。それよりもり長は(11オ)。千葉の館にそ着にける。折節千葉のすけ恒種。他行の時分。大助出合対面し。東国にをいて。千葉の介上総の介とて。父母のことし。一方かけては叶ひ候ましい。先上総へ御こし有て。かへりさまにしいしゆのやう。承度候。是は礼にて候とて。「カ、ルフシ」かうたる馬にくらををき。「同」鎧甲を引にけり。盛長は見るよりも。野にも山にもみかたぞと。それよりいとま。乞つゝ千葉の。館をそ。出にける。「コトハ」さる間盛長は。さきをきつと見たりければ。折節千葉(11ウ)

のすけ恒種。若堂四五騎相ぐし。ざんじんうたせ出来る。盛長は見るよりも。乗なからの対面は。恐入ては候らへ共。君よりの御使なれば。まつひら御めん候らへとて。千葉か駒に打よせ。かの有増をかたる。恒種聞て。さて父にて候大介は。何とか申されて候そ。大助の仰には。上総の介か参らは。千葉の介も参らんと。返事にて候。恒種きいて。それこそ何よりも恐入たる御返事を。申されて候ものかな。縦上総は

参らせす共。一騎成ともみかたに参り。君のまつ(12オ)

さきかけ討死し。名を後代に上へき也 「ツメ同」いてく領定申さ

んとて。墨すりなかし筆にそめ。本よりも千葉の介は。小ぶげんにて

候らへは。手せいおほくも候らはす。七百余騎にて参らんと長帳に判

をす多君に頼まれ奉る 「コトハ」それよりも盛長は。いほふいなん

てうふくてうなん。あびろ川上うさ山野辺。あなたこなたをふれてま

はる。頼まるゝ国は十三ヶ国。大名は七拾余人。小名数をしらす

「カ、ルフシ」我おとらしと判をすゑ 「同」君に頼まれ奉る(12ウ)

。伊豆の田中を立出て。百廿日と申には。お請の。判を取持て。なこ

やの御所に参けり。かの盛長を。見し人のほめぬ。人こそ。なかりけ

れ 「コトハ」さる間頼朝は。国々の人々の。おうけの判を御披見あ

つて。さては日本は我かまゝなりとおほしめし。伊豆の御山に御陣を

めされ。つゝくみかたをまち給ふに。我もくゝと参らせられけるを。

着到付て御らんするに。頼朝の御せい。以上三百五十三騎としるさ

るゝ。よりとも御説には。是はすけか祝言(13オ)

のはしめなれは。めんくゝの馬ともを一目見んとの御説なり 「イ

ロ」うけたまはり候とて。先一番に。近江源氏の太將に。佐々木の四

郎高綱の。踏雪に白くらをかせ。白さほさゝせ。御前をとをされたり。

あらけうがる馬のふぜいや。ところくゝに。四目結のかた付て。やさ

しき名馬のもんかなと。どつとほめてそとをされける。その次をみて

あれは。とゐ殿の小黒にくろくらをかせ。御まへをとをされたり。こ

の馬と申は。まだまき出の名馬にて。いさみにい(13ウ)

さんで。前のあしをづんとあげ。うしろのあしを引しき。かしらをふ

つて目を見出し。おとり出ていばふ 「ツメ同」是もおとらぬ。名馬

かなとつとほめてそとをしける。其次を見てあれは。さても御しう

とに。北条の四郎時政の。さゝ波あし毛といふ馬に。白くらをかせ白

さほさゝせ。六人の舍人にひかせ。御まへをとをされたり。おもしろ

の。馬のふせいや此馬と申は。骨はふとふて筋おほし。左右のおも顔

しゝもなく。耳はみじかくちいさくし。うわくび長く(14オ)

あつくして。下くびつとみじかし。むねは出てはたばりあり。尾口

ちいさく分入て。尾は三ぢうの。瀧のおつるかことくなり。左右の

もゝはからのびわ。てんじゆとはんじゆはらりともし。二めんさか

さまに。たてゝをいたかことくなり。おつさまさんづにしゝあまり。

よめの付さままねのくさり。くろかねをのべたることし。爪はあつ

ふてつゝたかし。千里を打ともつかるましい。前より見れば秋の鹿遠

山のとんたることくなり。そばより見ればにわ鳥か。大庭(14ウ)

におとり出。ときをうたふかことくなり。まはりて見れば。龍か雲を

引つれて虎か風に毛をふるつて。象の牙をかみならし。獅子かはかみ

をしたりしも。是にはいかてまさるへき。あつはれ馬のいきおいか

とどつとほめてそとをしける。是をはしめと仕て。さわらの十郎かい

かつちあし毛。狩野の介のかなつちあし毛田代のくわんじやかびでふ

くり毛。助恒か奥州くり毛。沼田の平内かとび雀。南条か小鷹かわら

毛。古堀かほかけ舟。三嶋の源蔵太か(15オ)

獅子の子に。左右藤太か岩くたぎ。土屋の三郎虎鴉毛。さて岡崎か深山鹿毛大貫の四郎の黒かす毛。惣して名馬の色々は。あしいかぶち。

くろかげ。つるぶちかげぶちあひさぶぶち。かうじゆくり毛姫くり毛。われもく／＼とひかれたり。以上三百二十五疋はいつれもおとらぬ名馬なり。「片ツメ」さる間よりとも。治承四年八月の。廿三日に。ひやうぐぞろへ馬そろへめされて。いつも久しき源氏の。白はたを。ほのく／＼とさし上真鶴かとうげに(15ウ)

打あかつて。御ぢんをめされしか。御代をめされんそのために。手せい七騎を。引わかつて。土井の宿とかうらよりも。御舟にめされ。安房の両嶋をこゝろかけ。沖中に白はたを。指上給へは。三浦横山たんだま。此よしを見まいらせ。あわきみの沖に御座あるに。いさやさはまいらんと。千騎二千騎。打つれく／＼参るほとに。むさしの国とかや。こうのろく所ぶんはいのみやの前にて着到付て見給ふに。頼朝の御せい(16オ)

廿八万騎に。程なくならせ給ひて。一天四海に。光りをはなす平家を。三とせ三月に責なびけ天下をおさめ給ふ事。八幡大菩薩の。御ちかひとこそきこえけれ(16ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(打)打波本、(慶)慶応大学伝小八郎本

10オ (毛)ハ冒頭カラ大道寺本ノ13オ「三百五十三騎としるさる」マデナシ。」○召れ(慶)めして仰けるはいかに盛長う

けたまはれ ○盛長承り(内・打)盛長御判を給り ○誰々と申共寿命めてたき人なればとて(慶)まづくはほうめでたき人なれば急 ○人なればとて(内・打)人なればと思ひ海のわたりをさうなくし ○とし積りて百六つになられしか君の御判と承りうち冠烏帽子き(慶)ナシ ○直垂ひぼつがい(内)ナシ

11ウ ○大助出合対面し東国において(慶)大助いで合見参あつて子にて候方殖これになければ力なし此所とまうすは ○是は礼にて候とて(慶)まづく／＼これはみぐるしくさふらへともとて ○さる間(内・打)かくて ○さる間盛長はさきをきつと見たりければ(慶)かゝつしところに

12ウ ○討死し(内・慶)高名し ○墨すりなかし筆にそめ(慶)ナシ ○いほふいなん(内)むさしの国に打超いほういなん ○頼まるゝ国は(打)国は ○我おとらしと判をすゑ(慶)ながちやうにはんをすへ

13オ ○お請の判を(慶)く／＼の大名のおうけのはんを ○国々の人々のおうけの判を御覧あつてさては日本は我かまゝなりとおほしめし(慶)ナシ ○つゝくみかたをまち給ふに(内)ナシ ○頼朝の御せい(内・打)ナシ ○よりもの(内・打)さる間頼朝の(内)ハ「三百五拾三騎としるさる」デ4丁ヲ終リ、5丁オヲ「さる間頼朝の御誕には」カラ始メル。

- (毛) ハココマデナシ。 ○すけかー(慶) ナシ
 13ウ ○あらけうがるー(慶) おもしろの
 14オ ○六人の舍人ー(内・毛・打・慶) 八人のとねり
 14ウ ○くさりー(内・毛・打・慶) ほね
 15オ ○沼田の平内ー(毛) 俣野の平内
 15ウ ○さる間よりともー(内・毛・打) さる程に人々

(高館)

さる間かまくら殿梶原平藏景時をまぢかくめしての御誼には、まことに義経かむほんにをゐてうたかふ所なし。いそきよしつねをたいじ、世をおさめんとの御誼なり。長崎の四郎に三百余騎を下したぶ。長崎三百余騎をたまはり。いそきおくにも着しかは。さいそくまはしせいそろへ。康平かたちによりきし。てるいの太郎を筆とりにて着到を付る。名字のさぶらひ三百余騎。その外都合兵者七千三百余騎(1オ)とはやちやくたうに付る。そもく比はいつ成らん。文治五年。閏四月廿七日今日は日からよからず。明日の辰の刻にむかふへしとさためて。大田山口中村に。すでに陣とつてひかへたり。扱も高館とのには。宵までは侍八人。太将ともに九人と聞えしか。次日の御合戦に。侍九人太将ともに十人の。ゆらひをくわしく尋るに。「サシクトキ」紀州くま野の住人に鈴木の子重家にて。物の哀をとゝめたり。有夜すゝ木女房にかたりけるは。なに(1ウ)かし思ふ事ありて。此眺奥州へまかりくだり候そや。心のまゝに罷下。

君のめてたふ御さあらは。「フシ同」明年の。夏の比たよりの。ふみを参らせん。なつの比しも。過行は。うき世は不定のならひにて。道の草葉の露霜と。消ぬるよと。おほしめし後世をはたのみ。奉る。暇申てさらはとて。ぢたひか鈴木殿。熊野そたちの人なれば山伏の。姿にさまをかへ。笈とつてかたにかけ。ものうき竹の。杖をつき其。ふしくによをこめて。藤白を立出(2オ)て。はやこゝのへに着にけり。人目しのふの旅なれば。いつしか花の都をは。かすみとともに立出て。大津の浦より舟にのり。海洋のうらにあかりつゝ。北国道の。うき難所を下らせ給ひける程に。七十五日と申には。奥州ころも川高たちの御所に。着にけり。「コトハ」すゝき何とかおもひけん。おいすゝかけをはかたはらに取かくし。打かけとり出きるまゝに。あみかさふかくとひつかうで。たかたち殿の門外によつて御内の躰を聞居(2ウ)たり。さても高館殿には。侍達をめさるゝに。いつもかわらぬむさし殿をさきとして。以上八人かしまる。判官御らん有て。いかにかたく。よしつねか運命あすをかきりなり。いそきよし経かくびをとつて。らいちやうの御目につけ。くんこうのしやうにあつからは。奉公の忠に後世をとへ。むさし坊弁慶は。中々あさらへわらつたる計にて御返事を申さす。片岡亀井の六郎か。目とめときつと見合て。こは御説とも存候らはす。たかあつて(3オ)御くびをたまはり。かうさんをは申へき。今迄候人々も。みな御供とこそおはすらん。さはありなから此中にも。おちんと思はん人のあら

は。ひらに。いとまを申て落よ。たれもうらみはのこらしと。座しきをきつと見渡せは「カ、ルモンタイ」吉竹広綱一同にすゝしく申され「フシ」たるものや「同」誰もか様に。申たき御。返事にて候そや。思ふにかたき暁よすへし。大手搦手と。二手にわけん事あらし。みかたはたとひ。ぶせいなりと。両陣に。むらかつて(3ウ)

いくさは花をちらすへし。まだほのくらき早朝に。あれは大手。是はからめてなんとゝて。こゑをはきくとも姿は見じ。我も人も。心しつかにあるときに。かみへ申て御酒給はり。最後の名残をおしむへし。尤然へしとて。種々の太瓶。おうつゝをおでいへ申出しつゝ。君も御出ましゝて。女房達のお酌にて。上にさかつき。すはりければ下は以上八人なり。三ごんの酒過れば。のちにはたかひに入乱れて。思ひさし思ひ取。自酌じもりのらく(4オ)

あそひ。まふつうたふつ呑ほとに。亀井かのふたる盃を。むさし殿におもひさしたつて舞をそ。舞にける「クリ」蓬萊山にはちとせふる松の枝には鶴すくう岩尾がか。たにかめあそふ「コトハ」しをりみつかしら。鴨のいれくびを一もみもうて。鴨の羽かへしをさつとさいて「カ、ル」立まはるところに「ツメ同」門外を見てあれは。太刀わきはさんたおとこの。あみ笠まぶかに「フシ」ひつかうたるか。唐居敷に。こしをかけ亀井か舞。を聞るたり「コトハ」亀井(4ウ)

の六郎も。あれはたれなるらんとは思へ共。おもひよりなき事なれば。舞すでにまひおさめ。しやくに手かけてるたりしに。門なる男のこゑ

として。大のこはねをさしあげ。御内へ案内申さんとたからかに呼はる。なりをしつめて座しきには。誰なるらんときく処に。斉藤の弁慶か。此こゑをきゝつけ。あれはかたきのやつはらか。案内けんみのそのため。いつはりまなてきたつてさう。なにさまちやうの使を「カ、ルツメ」あますまいと云儘に「同」袴の(5オ)

そばを高くとつて長刀おつとり出んとする。亀井の六郎も。つゝいて座しきをつつとたち。むさしか袖をひつとゝめなふしつまり給へ武蔵との。ふしきや此こゑを。聞たるやうにおもふとて。武蔵をとゝめてかめい「フシ同」はしり出てみてあれは。舎兄鈴木の三郎殿。旅やつれに。おもやせて一人爰に。立給ふ。亀井夢ともわきまへす。するゝと走りより。すゝ木か袂にとり付は。兄も弟に取付てきて。いかにゝと計。はるかに有て鈴木(5ウ)

との。何事かあるかめ井。亀井此よし承り。その事にて候そや。秀平うき世に有し程は。きみをもたつとみ申せしか。有為無常の習ひにて。秀平去年の冬。はかなくなり候そや。其子とも我か君に。心かはりを仕り。かまくらよりのけん見には。長崎の。四郎殿を申下し給はりて。扱国の太将に。照井伊達かむかひつゝ。太田山口。中村に陣取であるときいてさう。なとやかほとに御身の。おほしめし立ならは。二年も三ねんも。さきに(6オ)

お下りましゝて。一旦らくをも。し給ひて思出とおほしめすべきに。なんそつめたる御運かは。今日くたり。給ふこそよろこひの中のなけきなれ。今生にて見ゝえ。申こそ。何よりもつて。うれしう候らへう

き世の妄執はれてあり。神にもしろしめさるまし。とかめ。あやしむものあらし。おちこち人の。風情にておかへりあれや。鈴木との
 「ツメ同」鈴木此よし打ぎいて。ふかくなり亀井。れうもんけんじやうの。土にはねはうつむとも。名をはうつむか(6ウ)

ふかくさよ。師弟主従父子夫婦。三世のきえんなくしては。なにしに今日参るへき。鈴木か参りて候と。かみへ申せかめ井とて。わらんじぬきすてうへにきたる。打かけぬいでふわとすておとゝいつれて判の御前をさいてぞ参りける。「コトハ」判官御らんあつて。あら珍しや鈴木。しやくわくによおふあり。因果歴然の道理によつて。平家にきせし其科か。今義経にむくいきてあすをかきりと成ぬ。今まで候人々をも。かたきのゆるすならば。おとし(7オ)

たくはおもへとも。ゆるさねはちから及はず。汝をは人も見しるましいそ。遠近人のまなひにて。くま野へまかりかへり候らへ。見しものと思ひでは後世をはとうてたべ。鈴木ありても此軍に。勝へしともおほえずとうゝ帰り候らへ。すゝ木承り謹而曰。こは御誕とも存候らはす。きみにをかする科なくして。討れさせ給ふへき前業をいかゝおはしけん。なんそや鈴木めか。月日こそ多きに。今日参あふ事も。三世のきえんのくちせぬ故。いくさ(7ウ)

さんじて罷下り。さもあれ君の御最後所は。いつくにてか御座あるらんと。おもひやり申たる計にて。「サシイロ」門のからいしきにこしをかけて。たゝ一人すこゝと。腹きらんする事はなんはう無念に候へき。「コトハ」御具足一両給はつて。討死せんと申きつておちんす

るきしよくはなし。判官御らんあつてあふ。此うへはちから及はず。いてゝさらはず木に。具足を一両とらせんとて。小桜おとしの鎧を。めしよさせ給ひ。此鎧と申は。おこりの(8オ)

左藤か。子共かもうけのためにとおとしたてたる物の具なり。あに次信は小桜。舎弟忠信は。卯の花をこのめは。うの花おとしにけつこうし。相待る処にかれら兄弟は討れぬ。めんほくなければよし経。佐藤かたちに打こえ。子共か最後をかたつてきかす。母はちつともなけかずして。「クトキ」かゝる家の面目さふらふ。御供申出しより帰らん事は不定そと。思ひまふけてさふらふ。さは有なから兄弟か。もしも御供つかまつり。罷かへりて(8ウ)

さふらはゝ。とらせんする其ために。具足を武両。おとしたつる。これゝ御らんさふらへや。「フシ同」待て甲斐なき。このかた見を見つる事の。はかなさよ。たれによるひを。とらすへき。我が君にまいらせん。こさくらおとしをよし経に。卯の花おとしを。「ツメ」むさしとのに。えさせたる具足なり。ひとつにかれらか形見といひ又はさねよきくそくなり。自然の事の有ならば。よし経ちやくせんその為に。是まで持せて侍れ共。こへんに是をとらすとて。同毛の(9オ)

。三枚甲に。うちものそへ。鈴木かまへに。とうとをゐて旅やつれにさこそあるらんはやそこたまはれ鈴木殿。すゝ木面目ほとこして。御代か御代の御時に。千町万町給はつたるより今この鎧にしかしとて。かわらけ取上三はいくんたる鈴木殿か所存をはいやほめぬ人こそなかりけり。「コトハ」武蔵坊弁慶は。ちつともしほれぬまなこよりも。

涙をはら／＼となかいて。異国をへはしらす本朝にをゐて。我か君の御内の人々のやうにそろう(9ウ)

つる事有かたし。それをいかにと申に。一年。次信忠信か討死。伊勢駿河か京鎌倉にてのしにさま。たゞ今又鈴木殿か。おくそく一両給はつて。千丁万丁の御おんにかへしとよるこふつる事よ。「サシイロ」かほとまてよきらうどうをもち給ふ我か君の。御くわほうのほととうたてさは。せめて大国。四五か国。御知行なきこそ口おしけれ。「コトハ」おくかたのやつはらか。なんぜんぎにてよせきたりたるといふとも。公事武者のかりびやう。おもふにさこそ(10オ)

あらむすらん今は。此夜も更行らんに。のめや。うたへやさめけとてまふつうたふつさかもり。する既に其夜も。夜半計の事なるに。鈴木の三郎重家。ゐたる所をつんとたち。中門のらうに出。弟かめ井をちか付。いかに重清。今度紀州藤白を出しより。先祖重代につたはつたる腹巻を一両きて下る。此はら巻のゆらひを。くわしくかたつて聞すへし。皆はうはい達もきゝ給へ。かたしけなくも熊野権現のいにしへ。摩訶多国の(10ウ)

あるしとし。武皇の中の武王にて。天下を治給へはかいだひことしつかかなり。しかれ共この帝に。御代をつかせ給ふへきわうじさらにおはせねは。いかならんするきさきにか。王子の誕生あるへしとて。きさきの数をそろふるにすでに千人祝ひ申。「サシ」寵愛におほしめされたる。きさきに王子の御座なれば。「フシ同」ましてやうとき。かた様にかてかさらに。おはすへき。されともす急の后に。ごすいで

んと申こそ。くわいにんとおはしませ。みかと(11オ)

ゑいかなのめにて。今ははやよのきさき。御気色さらによからず。ごすいてんに打そひて。既に一の。きさきとし内裏へうつし申さんと。宣旨有し折ふしに。数百人の后たちは嫉みそねみて。みかと御座なき折ふしに。ものゝふをかたらひて。ごすいてんに乱れ入。きさきを害し。奉り深山ふかく。捨申。されといかなるふしきにや。死骸も破れそんせず。やかんのものもあぶさずし。まんする月に。たんじやうある。しかも太子とおはします(11ウ)

。人すむ山にてあらされは。人輪さらには。立よらす。こらうやかんは立よれとも食しぶくす事もなく。守護をくわへ。たてまつる。いたはしや太子は。母の。しかひのにうみをぶくし給へは。たちまちにじきとなり。やかんのものを友として。年月をふる程に。天の岩戸の。あけ暮とはや。七とせに。成給ふ。「ツメ同」天下にはなけきにて。遠国遠里はとふにて。たつね給へとまします。よをうき事におほしめし。既にはやくらゐを。すへりたまふ折ふし。たつとき人(12オ)のまし／＼て。居所をたつね給ふとて。山中に分入。太子を見付奉り。

内裏にかへつて奏聞申。臣下けいじやう。ふしきのおもひをなしつゝ。山中に分入。くわしく見奉れば。かたちはごすいでんにしてその面影もかはらず。太子御とし七さいなり。人を見なれ給はねは。しんらあたりへたちよるを。おちおのゝかせたまふを。ちけん上人はしりより。たいしをいたきとり申。ごすいてんのしかひをを。山中にびようをつき。こめたてまつりそのゝちに(12ウ)

。太子をは雲上へ。うつしたてまつる。みかとふしきにおほしめし。ちけん聖をめされて。くはしくとはせ給へは。ひじりもいかて存せん山中にいたつて。じゆげせきしやうをこゝろかけ。きよしよをたつぬるおりふしに。太子を見付たてまつり。奏聞申て候と。ありのまゝに申。みかとえいらんありあふにごれる世に生て。かいをたもつごうゐんに。かゝるつみを作る事はまるか科にてあらずや。かゝるものうき国には。ありてゑきなき事とて。万(13才)

里の飛車と申て。虚空をかける車に。いまの太子もろともに。すでにじやうし給ひけり。第一の臣下に。のふみの大臣重高。おくみの中将金光。かれら二人を供として。くるまのしぎにじやうじて。ひかしをさして飛給ふ。わか朝紀の国牟婁の郡おとなし里にしては又。ゆやごんげんとあらはれ。衆生を斉度し給へり。ごすいてんのわうじは。にやくわうじにておはします。のふみの大じんは。こもりの宮とげんぜらるゝ。おくみの中将は。飛行やしや(13ウ)

是なり。此御あとをしたひて。ちけん上人飛きたつて聖の宮と現せらるゝ。其外の神達は。次第／＼に帰朝して。四所明神。五大王子さんじやう十五しや。金剛夜叉。諸社と現し給ふも。みなこの時の人々そしかるにかめ井よくきけ。重高より重家まで十六代と覚るそ。重高のいにしへ。またた国より我朝へとばせ給ひし折ふし。みかとひやうじの其為に此はら巻を召れて。飛きたり給ふなり。代々嫡子につたはる家の(14才)

たから。今鈴木まで相伝す重代なれば身をはなさず。此度もきて下り。

おくかたのやつはらにとられて終にたもんの。たからとなさんおしきよあふ。それとてもちからなし。重家は面目にきみのきせながたまはりぬ。此度のつかれに。二両かさねん事かたしごへんに是をとらすると。唐錦威。こかねさねのはらまきを。ぬいてかめ井にとらせけり。亀井腹巻引立。これ見たまへや人々。ろくびやうぎやうの中にも。人の果報は儀に(14ウ)

よつて。次男に生れても。惣領をつくへしと。とかれたるは爰成へし。其時、いゑの重代を。かめいの六郎ゆづりえて。千筋の矢さきあたるとも。むな板にうけとめて。しなんす事のうれしやと。おとりあかつてよろこぶたるあつはれぶしの手本やとほめぬ人こそなかりけれ「コトハ」すでにそのよも。明かたの事なるに。武蔵坊弁慶は。ゐたる所をすんとたち。四間所へつつと入。いつもこのむかちんの直垂。水におしのわひだてし。みつ引れうのゆごて(15才)

さし。いまたよろひはきさきりけり。なし打ゑほしきるまゝに。三尺五寸のたちはいて。人々御免候らへとて。四間のでいより中門のらうに出て。からうとにこしをかけひかしむきにそあたりける。鷲の尾片岡。熊井太郎源八兵衛広綱「カ、ルツメ」備前の平四郎毛々のよろひ「同」甲の緒をしめ太刀はき矢おいてみななから。からうとにこしをかけ。目とめときつと見合たる。此人々のありさまは。樊噲長安録山も。おもてをそはめつゝはちぬへし(15ウ)

。其中に取ても。亀井の六郎重清は。一きわすくれていてたつたり。はたにとつては。唐紅ひつちかへ。びせいがうのはつたるに。よせか

けめゆいの直垂のくゝりをゆつてしめたりけり。楊梅桃李の左右の小手。白檀みかきのすねあて。くまのかわのみみたひ。白かねにてへりかねわたし。あくち高にふんがうたり。獅子にぼたんのわいたてしからにしきおどしこかねさねのはらまきざつくとゆりかけ。いと火おとしのよろひ。二両かさねてはらり(16オ)

とき。おとりあかつて高ひもかけゆつて上帯てうとしめ。九寸五分のよろひとをしをめてのわきにさいたりけり。一尺八寸のうち刀を。十文字にさすまゝに。三尺八寸候らひし。あふひ作りの太刀はいて。四十二さいたるたかうすびやうを。はづ高にとつて付おなし毛の五枚甲に。くわかたうつていくびにき白綾のほろをさつとかけ塗籠の弓の四人張。しめのせきづるかけさせ。まん中にきりよこたへて。四間のでいより中門へゆるぎ出たる其ありさま(16ウ)

ものによくくたふれは。めいぼく太子はくたわう。我朝にてはまさかどすみともよし野山にて名をあげし。奥州の忠信も。たゞ是程こそ有つらめきりやうにせていたつたりやとこゑをそろへてほめたりけり。「コトハ」かくて。おくかたの軍兵うつたつよしこそきこえけれ。先大手へは。ときの実検人。長崎殿を太將にて。三千八百余騎。ころも川大手の門へおしよする。からめ手へは。伊達とりのうみ。二千五百余騎にて。西の小門におしよする(17オ)

。御所の手は。大手は鈴木兄弟兼房。只三騎にてかためぬ。からめ手をは。鷲の尾片岡。熊井太郎源八兵衛広綱。以上五騎にてひかへたり。弁慶はうきむしやにて。大手の矢くらにあかり。はしりまはつて軍の

下知をそしたりける。かめいの六郎も。おなしく矢倉にあかり。甲をぬいてとうとをき。弓取なをしつるくいしめしす引してこそたつたりけれ。兄のすゝ木か。見あけてきつと見て。ごへんは矢くらにありたるや。かめ井承(17ウ)

。さん候此所と申は。平城にては候らへとも。久しうこしらへたる所にて。堀ひろうしてそふかし。いかにかたきかつめよせ。うめ草をこむと申とも。三重の堀をは。たゞ一時にはよもうめさうし。其とき。重家重清兄弟と名のつてきつて出。おくかたのやつはらに手なみを見せてくれさうへし。鈴木きいて。よく云たり亀井。さりながら重家は。なが旅に。物の具にかたひかせ。矢つかも。矢つほも覚ねとも。さらは射てみんかめ井とておなしく矢倉(18オ)

にあかる。「ツメ」かくてよせての人々は。大手からめて。もみ合ときをとつとあくる。ろくしゆしんとうかつくやらん。天地ひゝいておびたゝし。城には以上九人の人々軍の法とてやさしくも。ときをおつとそあはせたる。ものによくくたふれは。雷公わたる春の野に「フシ同」古巢を出る。鷲のはつ音を。告る。ことくなり。「コトハ」ときのことゑもしまりければ。てる井の太郎たかのを。一陣に駒かけ出し。いかに御陣へ申へき子細の候。きのふまでは(18ウ)

判官殿を。主君とあふき申といへど。かまくらとのの御意に背かき給ふによつて。長崎の四郎殿御教書をたいし。御下向のその上。天か下に住なから。いはひ申に及はざるによつて。義経の御自害ましまさは。かいしやく申せとの御つかひに。たかのをまいつて候と。申させ給へ

人々と弓杖にすかつて引へたり。武蔵坊弁慶は。矢くらのあゆみの板を。こほれよととう。くくとふみならして。なにかういふはてる井めかれ。角うつたる甲を(19オ)

き。やうぎこつからゆかしくして。よき馬にのつたれば。秀平か子共の中には。たれなるらんときく処に。又郎等のてる井めが。この門外まで参りきて。馬の上にての名乗やう。「ツメ同」狼藉なり其陣の引のけとそ申ける。てる井の太郎か是をき。かくの給ふはむさし殿かことめつらしきざうごんかな。君をふかくたつとめは。しんのうやまふ道理あり。かまくら殿の御教書たいしけふの太将たまはつて。まかりむかつたたかのをにて(19ウ)

。わ人共をは真実に。物の教とは思はぬなり。無用の剛言申さんよりも甲をぬいでゆづるをはづしいのちをつけとそ申ける。武蔵坊弁慶も言葉なくしてたつたりけり。かめ井の六郎か。むさしかあたりへ立よつて。なふくむさし殿。神明をもたつとめす。ぶめいをもおそれず。法にまかせすふる舞候傍若無人のやつめにはなにをおほせ候ともたゞ犬のきやうすににたるへし。無用の論をとめ給へ君こそ御腹を召るゝとも(20オ)

。我等かくて候はゝ軍は花をちらすへし。かう申つわものを。いかなるものとおもふそ。ゆや権現の一の。臣下にのうみ的大臣重高よりも十六代のこうるん。鈴木の庄司か次男。亀井の六郎重清。年つもつて廿六。てる井とのに矢一筋。奉らんやうけてみよと。いひもあへす。四人はりに十四そく。とつてからと打つかひ。もとはづうら筈ひとつ

になれと。きりくくと引しをり。まちをこふしにひつかけ。えいやつかつてうつたるはどうつき(20ウ)

なんどのことくなり。一陣にすゝんたる。てるいかしやていに。高野ゝ四郎か。駒ひつそはめてひかへたる。よろひの袖の三の板。めてのはいたておくりの板。肝のたはねをするりと通し相引かけてうらをかかけつとぬけてあまる矢か。うらにひかへたるてる井か馬のふと腹に。羽ふくらせめてずつはとたつ。高野はいた手なりければ。うけも合せすめてかへしに。しころをついてとうとおつればてる井か馬はいた手を負。屏風かへしにひつたと(21オ)

かへし高膝おつてふしけれ。はてる井は馬よりおりたつた。城にはむさしすゝ木を先として。あたりやくとゆり上くわらひけり。よせては射られておともせず。異国のきんくわかゆみのいもたゝ是ほとこそ有つらめとよせ手も舌をまいたりけり。「コトハ」兄のすゝ木か。弟かめ井かすかたを。見上てつくくと見て。「クトキ」あゝいたりや亀井。此比九ねんいかほとおいたつてあるやらんと。こゝろもとなくおもひはるく下りて見て(21ウ)

あれは。やうぎこつからよりもすぐれたる。長矢東の大ゆみは。世にもふしきに思ひしに。おして。かつてのさたまつて。「フシ」射たりやかめ井。「同」あゝいたりや亀井殿。たゝ今その氣しよくを。きの国に。とゝめをく一族。ともに見せばやな。君も御出あつて御見物あれかしな。重家も矢。「コトハ」ひとつ射て。見せ申さんといふまゝに。十三束みつかけの。中さしぬいてあふら引。矢さまひろく

とひかせ。いかにおくかたの軍兵。今のかめ井か兄。鈴木(22オ)

の庄司とはなにかし事なり。四国。九国の御かせんには御供申。度々の高名なをあらはし。御代しつまつてのち。紀州藤白は本領なれは。あんどを申所領に。下りぎけいのみやこ下着をはしらて御供申さぬなり。さはありなから此ころ九年。君の御事かめ井か行多。一かたならぬによりさうて。ほこうで紀州藤しろを出。いそくとすれどかちじ。日数つもつて昨日まで。七十五日にてゆふへ付て。今日の御合戦にあふたるはなんぼう(22ウ)

果報のものそ。亀井か矢ほとなくとも。うけてみよとそいふたりける。おुकかたの軍兵は。たてのはをつきかさねて。「ツメ同」鈴木か射る矢をまちかけたり。すゝ木此よし見るよりも。十三そくみつかけ。三人はりにからりとつかひもとはつうらはつひとつになれと。きり／＼と引しほり。かなくりはなしにかつきとはなす。一ぢんにすゝんたる。てる井かいとこに。丸田の藤次か。高野かとうの矢一筋と。すゝみかけたるむな板に。たつよりはやくくつ(23オ)

とぬけ。うらにひかへたる。麦野の四郎か。くびのほねにひつしとたつ。二騎のむしやかためすして。ゆん手馬手へとう。／＼とおちにけり。つゝく軍兵これを見て。このものともか矢さきにはくろかねの楯をついたりとも。かなふへしともおほえすや。此陣ひけやといふまゝにむら／＼はつと引たりけり。鈴木兄弟矢倉よりも。くだりこふしに。毛よきむしやを。かいゑり／＼。さしとり引つめ。さん／＼に射たりけり。矢たね(23ウ)

つくれは。鈴木兄弟矢くらをゆらりととんでおり。駒引よせてうちのり。ころも川の中の瀬を。水にかもめか。一むすひなみまをつたふ風情にて。あふみのはなにてなみをたゝかせざつぎめかいてわたしけり。おुकかたの軍兵。此よしを見るよりも。すゝ木兄弟手とりにせよ。太刀もかたなも入へきかとしておりかさなつてひしめいたり。鈴木兄弟。このよしを見るよりもたまになれたるほうらいの鳥のふせいもかくやらん。驚く(24オ)

けしきはなかりけり大せいの中へわつて入。にしからひかし北からみなみ。くもてかくなわ十もんしやつはなかたといふものに。さん／＼にきつたりけり。鈴木の三郎重家。十三騎きつておとせは。弟亀井か手にかけて。廿七騎なきふする。けにはかたきもこらへはこそ。風にこの葉のちるやうにむら／＼はつと引たりけり。此人々は手もおはすし。川しつ／＼とわたしもとし。いきおひかゝつてひかへたるは異國の樊噲長良もかく(24ウ)

やとおもひしられてあり。「コトハ」去問むさしはう弁慶は。矢くらの上にてつく／＼と見て。あらおもしろと。すゝ木兄弟か合戦したるやうや。さすがにあのかた／＼は。天下の御代。公所のいくさをしならふたる人々にて。かたきの色をさとつて。かけ引つるこゝろねのおもしろさよ。しはらく人々御待あれ。でたつてこんといふまゝに。おでいへつつといり。くろいとおとしのよろひをき。さきのなし打えはしにて。今度はしら柄の(25オ)

長刀をぶちかたけ。大手の矢倉に走りあかつて。「カ、ルツメ」東む

きにそ。たつたりける。「同」抑比はいつなるらん。文治五年。壬四月の廿八日の。いまた巳の刻計なるにてりにつたる朝日に。物の具のかなものは折から色やまさるらん。ひらいた扇は紅にて。日にさしむかつてたつたりける。むさし坊かあり様はどうばつびしやもん四天王のあれたるけしきもかくやらん。「コトハ」大音あげて。いかにおく方の軍兵。なりをしつめて。ことの心をたしかにきけ(25ウ)

「イロ」それ人間の命は電光朝露。うつも討るゝも。夢のたはふれ「コトハ」きのふ迄は肩をならへ。ひざをくみしめんゝか。けふかたきとなる事も。因果れきせんの道理によつて世をも人をもうらむまし。去ながら汝等か。遠国にすんで。入取強盗し。堺のはうじ論じゝ。廿騎卅騎。引わけゝ。こゝかしこにて。そらいんじして。つぶて打たらんにはにましいぞ。今日武蔵かする軍こそ。手本に見ならへ。奥方の軍兵。今日むさしか長刀にて。切のこされたらんする(26オ)輩は。見し者と思出は後世をはとうてたへ。末代の物語に。弁慶舞を一番まおふそよはやいてたへや人々。鈴木兄弟は。兼て用意やしたりけん。鼓を取出したゝきあげてはやす。本より武蔵は。さんとにてても乱舞えんねんの上手。舞は一手ならふたり。長刀のゑを。てうゝとつて。調子をうかかふてたつたりしか。かすみにかすんで。大きなこゑをはつたとあげて一声をそとつたりける。「サシモンタイ」うれしやとうゝと。なるは。瀧の(26ウ)

水／＼日はてるとも。いつもたえせし面白や／＼はなをなかつは吉野の川／＼いかだを下すは／＼大井川「ツメ同」紅葉をなかつは立田

川。都あたりに。名河は。さま／＼多けれと遠国ながら名所かな。きり山高根の。残りの雪きえ。谷のつらゝもとけぬれは。ころも川の水かさまさつて。奥かたの軍兵を。弁慶か長刀にて。みなとをさいてきりなかつゝと。もみえほしと云曲を。一拍子はらりとふんてひらいた扇を矢倉より。ころも川へぎつとなげ入扇(27オ)

の落るよりはやくあふ矢倉をとんでおりたりけりさんのべだちのしらあし毛。七寸八分明六さいに。引よせゆらりとつたりけり。鷲の尾片岡か。さきにかけんとすゝんたり。弁慶か是を見て。いで／＼武蔵あら切せん。あとをほこなせわかむしや共とてさきかけしてこそ渡しけれ。むかひはしのぶ元義たけひ丸田をさきとして。おくにはわれとおほしきもの三百騎計でひかへたる。陣の中へ武蔵。駒をさつとかけ入たり。おく方の軍兵は。陣をふ(27ウ)

たつに分たりけり。去共爰に。高田の太郎と名乗て。武蔵坊に渡りあふ。弁慶か是を見てもつて。ひらいて。横手切にかつしときる。甲の弓手のふきかへし。おもてのほうさき。めてのかふりの板をかけてずんどぎつてそ落しける。花さき此よし見るよりも。あつきつたりや武蔵殿。そこを引なといふまゝに。すきまもなくかゝりけり。弁慶これをみて。もつてひらいて。おかみ打にてうとうつ。甲のまつかう切わつて。うしろはしころ母衣付。前へは半首よだれ(28オ)かね。四枚かなどうひつしき草摺ふたつにさつと打わられて弓手馬手へさげけたり。柴田の四郎か是を見て。あつきつたりや武蔵殿。そこをひくなどいふまゝに。すきまもなくかゝりけり。弁慶是を見てあふ。

奥方の軍兵は。心はかうにて有けるそや。しりそくふせいの見えさるは。手なみの程を見せんとて。もつてひらいて。ちやうと打たりけり柴田もきこふる兵者にて。冠の板にて請なかし。さらぬていにてかけとをす。二陣につゝいたる。亀井の六郎か(28ウ)

。武蔵殿の切のこしを。請とつたりやといふまゝに。あふひ作り三尺八寸。横手切にかつちとさる。かめ井がうでやつよかりけん。太刀のかねやよかりけん。四枚どうをおしかけ。廿五さいたるそやをかけ。しや腰のつがひをは。車きりと云ものにふつつときつてそ落しける。かみはぬけてとうとおつれはしもはくらにそのつたりける。是を初て七騎の人。いれちかへもみちかへ散々にきつてそまはりける。懸りける処に。土佐の八郎たかのをと。亀井の六郎重清。むすとくんで二人か(29オ)

両馬のあいにとうとおつるかめ井無双のかうの者。かたきとくむならは。大せい定ておりやうへしと。いる兼てさとり。土佐をとつておさへて。くびつと打落し。立あからんとする処に。ときかめのと十郎か。すきをあらせずおり相て。かめ井か弓手のかいなをは。水もたまらす打落すかめ井無双の剛の者。心は高砂や。たかさごの。松のみとりとはゆれとも。痛手を負ぬれば。太刀を杖につき今をかきりと見ゆる。舎兄鈴木の三郎。大せいの(29ウ)

中にて戦しか。弟かめ井かいたでを負。存命不定なるをき。敵を四方へおつちらし。我身をきつと見たりければ痛手薄手のきらひなく。十三所手負たり。今はかうと思ひて。かめ井をかたに引かけ。城の内

につつと入。高き所におろしをきやあ「フシ」そこで腹きれかめ井南無阿弥陀佛ともろとも。鈴木は生年三十三。かめ井の六郎廿六。さしちかへて。死にけるをおしまぬ。者は。なかりけり「コトハ」そのうち弁慶判官の御まへに参り。はや鈴木兄弟こそ。討死(30オ)を任て候へと申せは。判官聞召れて。亀井か事は兼てより。思ひまうけたる事。むさんや鈴木。紀州藤白よりはるく下り。よしなき主のかたふどして討れぬるこそむさんなれ。けさよりよむ御経もはや。ほうなふの時分になるそ。ふせいでたべや武蔵。弁慶承り。今度は。なにかしか死番にあたつて候と。申もあへす。おでいへつと入。鉄を。あつき五分にきたはせ。おけがわとうと名付たるを。刀たまりにきたりけり。黒糸威の鎧。いと火(30ウ)

威の鎧。三両重ねざつくとさる。箆刀くびかき刀。三腰までこそさいたりけれ。長刀こそりはを打ちかへ。くらの前輪にしめ付。弓手に熊手おつとつて。めてに長刀を打かたけ。膝にて馬をのつたりけり。弁慶かかけ入はたゞ小山のうごくことくなり。大せいの中へわつてひさ口たかも馬の腹。はらりく引破れはしやうぎだをしの如くなり。此いきおいに恐れて。すて鞭ぶつてにくる所へ。弁慶駒をかけよせ。くま手をさし渡し。甲の(31オ)

てへんにひつかけ。えいといふては引よせさげぎりしてぞ捨にける。いはんやかんわりもろこしまで。其名をえたる弁慶か。今を最後の合戦に。面をあわする者はなし。怒れる眼は黒雲の所ところの晴間より。朝日のうつろふことくなり。かたきをなびけておめくをと。らいでん

稲妻はたゝかみ。獅子象虎の吠るこゑかくやと思ひ知られたり。弁慶か二度のかけに。おくかたの軍兵は百八十騎討れたり。今は。むかふ敵のあらされば。あゝ(31ウ)

ものくさい軍かな。おもふつる事よとて。小高き所に駒かけあげ。しはらく陣をそとつたりける。懸りける処に。信夫の小太郎といひける者。弁慶か以前のかけあしに父をうたせ。一矢いばやとねらひしが。はや爰にて見付。なゝめならずによるこんで。よつひいてひやうといた。弁慶かのつどく／＼とひかへたる。胸板にはつしと伸る。小兵のいる矢のかなしさは。ひぞりける其矢か。内甲にからりと入て。腕のくさりひつしとたつ。えゝもの／＼しと云まゝに(32オ)

。矢をかいかなくつて見たりければ。鳥の舌にてやいたりけん。からは抜て根はとまる。さしにも剛なる弁慶も。馬より下にとうとおつる。「サシイロ」あら無念や。斉藤の武蔵とて鬼神のやうにいはいれしか。か程のはそ矢にあたつてはかなくならんするくちおしきよ。「コトハ」最後にきやつをきらすは。よみぢのさはりと成へし。去なからいせんのことく。馬に取のつて追ならば。おぢてさうなふ近付まし。所詮そら死をはしめ。近付ん所をきつてくれはやと思ひ(32ウ)

。そばなる甲ひつかけそら死してそだるみける。しのぶ此よし見るよりも。いかにめん／＼の。鬼神のやうにの給ひし。斉藤の弁慶をは。なにかしか手にかけていおとして候。くびとつてみせ申さんといふまゝに。あぶひ作り三尺八寸。肩間にさしかさしもみにまふてそ走りける。弁慶しころの隙よりも。見あけてきつと見て。「ツメ同」あつ

はれ器量や。よいきりやうかな。あつたらわかいものを。弁慶か手にかけうしなはん事のむさんさよ。太刀のすんなのびたる(33オ)

や。きやつに一太刀討れては。あしかりなんと思ひて。ちり／＼とつめよせ。うしおきにかつはとおき。狼藉なるやつめには。手なみの程をみせんとて。そばなる長刀おつとつて。おつつめさらりとないたりけり。たかもゝきつておとされ。のつけにかへる所を。ほそくびちうに打おとしあけにそふだる長刀。弓手のかたになけかけ。駒引よせて打乗。城の内につつと入。駒をかしこにのり放し大長刀にすかり。たんど／＼とたゝよひ。あら。「フシ」くるしや。兼房よ君は。いつく(33ウ)

に。おはします。「コトハ」かねふさ武蔵か手を引て御まへさして参る。判官御らんあつて。あれはむさしか。さん候。こゑをきけはいにしへのむさし。姿はたゝ鬼神のことし。うら山しやな武蔵は。生をかへすたちまち。あら人かみとなりつる事よ。それへ／＼と仰ければ。承ると申て。おちえんにずんとあかり。鎧の袖をひたしいて今をかきりと見ゆるか。兼房をちか付。最後に若君を一目拝み申さんと云。兼房。若君をいたき申武蔵か手にそ渡しける。「クトキ」弁慶(34オ)

若君をいたき申をくれのかみをかきなて。かめわり山のとうげにて御産ならせ給ひし時。弁慶か参りうふ湯をひかせ申。男子は七歳までものあやかりと承はる。若君の御果報あやからせ給はゝ。伯父頼朝に御あやかり候らへ。かいらききは御親父判官弓は為朝の御ゆんせい。二相をさとつてあくまのものゝおそれんな。平のちゝぶに御あやかり候ら

へ。討物めされものゝ骨きつて人におちられ給はんは。ものその数にて候らはね共かう申むさしめに(34ウ)

あやからせ給へ。命の長く渡らせ給はんは。三浦の大介か百六に成しに。御あやかり候らへと「フシ同」申せし事の夢となり。いまた十にもたらすして。ころも川の。水のあわと消させ給はんはいたはしやと。はら／＼と鳴ければ。あゝいたはしや若君は。何のよしみを。しろしめされさりしか。弁慶かあらけなき。いて立にもおち給はず。むな板をくたりに。あけのちしほに染かへし。なかるゝ血を御覧して。いたいけしたる。御手にて。かきなてさせ給ひつゝ。ひし／＼といたきつき。わつ(35オ)

とききはせ給ふにそ。おまへの女房おすへの人。兼房も。武蔵も。きえ。いるやうに。なきにけり「コトハ」判官御らんあつて。むかし。か最後に酒をのませよ。承はると申て。蒔絵の盤に。紅葉のかわらけをすゑて出。御前へ参らせ上る。判官とり上させ給ひて。是は。二世までをさす給はれ。弁慶あまりのかたしけなきに。たぶ／＼と引へ。ゆつく／＼とはほしけれとも「サシ」腕かぎれたる事なれば。血にましはりて此酒か「フシ同」むないたを。くたりに(35ウ)

。さらり。／＼と。なかれけり「コトハ」判官御覧あつて。武蔵か最後は近付たるそ。念仏とすゝめよ。承と申て。兼房念仏とすゝむれば。よせての兵者是をきゝ。城のうちに念仏のこゑのきかふるは。いかさまむさしか腹をきるか。大剛一の兵者の。自害のやういさ見ならつて手本にせん。尤然へしとて。我さきにとそ乱れ入。判官御らんあ

つて。あはかたきの近付は。弁慶は腹をきれ。兼房はふせき矢いよ。お経せんする間とて御座を立たたまへは(36オ)

。弁慶は。かたきの呼はるこはねをちからにし。長刀にすかつて。又たんじ／＼とたゝよふ。判官御らんあつて。又きつて出るか武蔵。さん候「イロ」判官思ひつゝけて。かくはかり「サシ」のちの世も。又後の世も。めぐりあへ。そむ紫の。雲のうへまで「イロ」弁慶余りの忝さに返哥とおほしくて。かくはかり六道の。ちまたのすゑにまでよ。君。をくれさきたつ。ならひ「ツメ同」ありともと。かやうに申て。ほりの舟橋をかふ／＼と渡りけり。おくかたの軍兵。このよしを見るよりも。あらおそ(36ウ)

ろしや又弁慶かかくるは。爰をひけやといふまゝに我さきにとそにけにける。ころも川さつとおつこし。むかひのはどたにてひやうどうづる兵者を十七八きぎりふせ。こなたのはどたへ。かへらんとしたりしか次第にしやうねみたるれば。にしむきにつつたつて長刀まなごにゆりたてゝ。光明真言となへつゝ。しやうねん三十八にして。ころも川の立往生をおしまぬものはなかりけり「コトハ」おくかたの軍兵。此よしを見るよりも。あらおそろしと又。弁慶か人をたはかつて(37オ)

きらんとする計略よ。ちかふよつては叶ふましいそ。遠矢にいよといふまゝに。さし取引つめ。さん／＼にいたりけり。武蔵にあたるその矢は。あしをたはねて。まきの板戸をつく風情。もとより死たへんけいにて。その身をちつともいたます。かゝりける処に。ぬまだての庄

司か申けるは。いかにかたく。いたつて心のかうなるものは。立なからしするいはれのありといふに。たれかある。ちかふよつて。弓のはづにてちつとつて見よ。けにく。是はいはれたり。廿騎(37ウ)

三十騎。かけよせくしけれとも手もとへよるものなかりけり。沼楯このよし見るよりも。えゝ臆病なる人々かな。そのけ。ぬまたてつかんといふまゝに。駒の手綱かいくつて。かつしくとあゆませよせ。弓のはつをおつとりのへておづくかつはとついた。「ツメ同」もとよりしゝた弁慶でかれ木をたをすことくに。たんぶとまろひけり。まろひけるそのせんに。もつたる長刀のひらりとするを見るよりも。ぬまだての庄司は。死たるものとしらずし又(38ウ)

きつてかゝると心得。きもたましるも身にそはず駒よりしもにころびおち。うきぬしつみぬなかれて。ころも川のいせきに。せかれてしんたりしを。貴賤上下おしなへ。にくまぬものはなかりけり(38ウ)

【校異】

本曲において校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(打)打波本、(松)松村本、(藤)藤井氏本、(慶)慶応大学伝小八郎本。

1オ ○名字のさぶらひ三百余騎その外都合兵者七千三百余騎―(内)毛・打)惣領なればやす平一の筆につく次ににしきと四郎もと

よしひつめの五郎のぐみをぐりをさきとしてむねとのつはもの七千三百余騎(但シ(打)ハ「めうじのさむらい三百よき其外つがうつわもの以上」ト傍書。)、(慶)そうりやうなれば西城戸一の筆に付つぎに康平四郎基嘉樋側五郎野與小栗をさきとして都合兵者七千三百余騎

2ウ ○取かくし―(内・毛)取置、(慶)取かくしおひの中より ○たかたち殿の門外によつて―(慶)太刀わきばさむて高館殿のていを心しづかにみたまつるにあらふしきや紀州藤城にてうけたまはりおよびしはひばんたうばんせうにんさなから御内にみちくゝて門外に駒のたてどもなきやうに承りおよびてあるになにとてさびしく御座あるらんふしきさよとおもひものからいしきにこしをかけ

3オ ○さても高館殿には―(内・毛・打・慶)扱も高館殿にはかたきむかふよし聞得ければ ○いかにかたく…よし経かくびをとつて―(慶)義経かうんめいすゑになつてかぎりとなぬかたくが手に懸くびとり ○いそきよし経かくびをとつて―(内)かたか手に掛それかしか頸を取閑東へまいらせ、(毛・打)かたか手にかけ某か首を取、(松・藤)なにがしが頸を取り

5オ ○男のこゑとして―(松・藤・慶)男とおぼしくて
5ウ ○つつと―(内・毛・松・藤)つむと、(慶)直ど ○立給ふ―(打)おはします

7オ ○判官御覽あつてあら―(内・毛)義経御覽あつて如何に、(松

・藤)義経御覽有て荒、(打・慶)判官御覽あつて如何に ○今まて候―(内・毛・打・松・藤)是に候、(慶)是にありあふ ○かたきのゆるすならはおとしたくはおもへとも―(慶)おとし度はおもへともかたき

7ウ ○遠近人の―(他本)とかめあやしむ者あらし遠近人の ○くま野へ―(他本)はやく熊野に ○見しものと思ひでは後世をはとうてたべ―(慶)ナシ ○勝へしともおほえず―(内)かつへきにもあらず、(毛・打・松・藤・慶)かつへきにてもさふらはす ○こは御説とも存候らはす―(内・毛・打・松・藤)荒御情なの御説や候、(慶)あら口惜の御説や候

8オ ○御具足―(内・毛・打)是非御具足 ○判官御らんあつてあふ―(内・毛・打)判官きこしめされて ○めしよせさせ―(内・毛・打)めしいたさせ、(慶)取いださせ ○おこりの―(他本)小栗の

8ウ ○ためにとておとしたたる物の具なり―(慶)ために具足を二両をとしたつる ○母はちつとも―(慶)母のにかうは ○罷かへりて―(内・毛・松・藤・慶)罷くたりて

9ウ ○ちつともしほれぬ―(慶)此よしをつくくとみてちつともしほれぬ

10ウ ○ゐたる所をづんとたち―(毛・松・藤)ナシ ○今度―(内・毛・打・松・藤)今度なにかし、(慶)今度重家

11オ ○治給へは―(内・毛)守りたまへは、(打)まほり給へは

〔「おさめ」と傍書〕

15オ ○明かたの事なるに―(内・毛・打・松・藤)明かたになりしかは ○かちんの直垂―(慶)紺地のひたゝれ

15ウ ○なし打糸ほしきるまゝに三尺五寸のたちはいて―(内・毛・打)なしうち糸ほしおつこふてしらあやたゝんてはちまきにむすとしめ二尺あまりなるうちかたなを十文字にさすまゝに四尺二寸の太刀はひて、(松・藤)四尺二寸の太刀帯て、(慶)なしうち糸ほしをつこふでしらあやたゝんてはちまきにむすとしめ四尺二寸の太刀はいて ○ひかしむきにそゐたりける―(慶)鈴木三郎重家も魚龍嶋摺のひたゝれ君より下し給はつたる小桜綴しのよろいをきおなじけの三まいかふとのをゝしめ三十六さひたる大中黒の征矢をふて三人ばりの真中握惟も四間の出るより中門の廊にいでからうとにこしをかけひがしむきにそゐたりける

17オ ○かくて―(慶)すでに其夜もあけゝれば

17ウ ○源兵衛広綱―(慶)ナシ ○あかりはしりまはつて―(内・毛・打)はしりあかつて、(慶)はしりあがつてからうとに腰をかきひかしむきにそゐたりける ○兄のすゝ木か―(内・毛・打)兄の鈴木弟く亀井を、(慶)あにのすぶきかめいがすかたを

18オ ○平城にては候らへとも―(慶)ナシ ○よく云たり亀井さりなから―(内・毛・慶)あふよく云たり亀井但、(打・松・藤)よくいふたりたゝ ○物の具に―(他本)腹巻に 矢つかも矢つかも―(内・毛・打・松・藤)矢つかも矢つかも

18ウ ○いかに御陣へ申へき子細の候―(慶) 大音あげていかに御ぢ

んへ申度事の候

19オ ○背かき給ふによつて―(他本) そむきおはしますさるによつて

19ウ ○きく処に―(他本) おもひしに

21オ ○鷹野々四郎―(内・毛・松・藤) たかのゝ次郎 ○ひつたと

かへし―(毛) ひつたとかへしにひつたとかへし

21ウ ○弟かめ井かすかたを―(内・毛) 弟く亀井を、(松・藤・慶) 亀井がすがたを ○此比九ねん―(他本) この五六年はなれ

御辺

22オ ○おくかたの軍兵―(松・藤) よせ手の軍兵

22ウ ○なにかしか事なり―(内・毛・打・慶) 我事也、(松) 我事也

「なにがしがことなり」ト傍書 ○あんどを申―(慶) ナシ

○此ころ九年―(毛・打・松・藤) 此五六年、(慶) ナシ ○君の御事―(内・毛・打・松・藤) 紀州藤代にありとはいへと君の御

事

25オ ○つくく〜と見て―(慶) 此よしをつく〜みて ○天下の御

代―(他本) 天下のごよう ○御待あれ―(慶) やぐらにあがつ

ておまちあれ

25ウ ○東むきにそたつたりける―(打) ナシ ○大音あげて―(内

・毛・打・松・藤) 大音上てよはゝる、(慶) 大音あげて申す

26オ ○引わけく〜―(打・慶) ナシ ○こゝかしこにて―(慶) ナ

シ ○手本に見ならへ奥方の軍兵今日むさしか長刀にて―(松・藤) 手本よ見習へ何がしが長刀にて、(慶) 手本よみならへ今日某

が

26ウ ○本より―(他本) ちたひ ○てうく〜とつて―(内・毛・

打・慶) とふく〜とつて、(慶) 百々とつめて

29ウ ○打落し―(他本) かき落し

30オ ○そのゝち弁慶判官の―(他本) むさし坊弁慶君の

30ウ ○兼てより―(慶) ナシ ○紀州藤白より―(他本) 紀伊国より ○よしなき主―(内・毛・松・藤) 世になき主、(打) よにな

きしう「おん」ト傍書、(慶) 由而主 ○黒糸威の鎧いと火威の

鎧―(毛) 糸赤綴の鎧黒糸綴の鎧、(打) いとひおとしのよろいく

ろいとおとしのよろい、「はらまき」一うの花おとしのよろい」ト傍

書

32オ ○信夫の小太郎―(内・毛・打・松・藤) しのふのしやうしか

嫡子小太郎、(慶) 信夫の庄司が嫡子 といひける者弁慶か以前

のかけあしに―(慶) 十八歳に成けるが弁慶が二度のかけに ○

なゝめならずによろこんで―(慶) ナシ ○よつひいてひやうと

いた―(内・毛・松・藤) 弓と矢をうちつかつてかひかなくつて

ひやうといた、(打) 弓を「とやを」ふせて打つかいかいなく、

つてひやうといた「りはなちにはなつ」、(慶) 八束矢束を二人張

とつてからと打つがひよつひいてひやうといた

33オ ○いかにめんく〜の―(他本) さこそ人々の ○斎藤の弁慶を

は―(内・毛・打) 武蔵坊弁慶をこそ、(松・藤) 武蔵坊弁慶を
ば、(慶) 西藤の弁慶をこそ ○あぶひ作り三尺八寸―(内・毛・
打・松・藤) いか物つくり三尺八寸、(慶) 三尺八寸の鯉作り ○
眉間にさしかさし―(内・毛・打・松・藤) まつかふにさしかさ
し、(慶) するりとぬひて

33ウ ○ちり／＼と―(他本) ちか／＼と

34オ ○なりつる事よ―(内・毛・松・藤) 成たるそや、(打・慶) な
りたるや ○鎧の袖を―(内) 甲をぬひてとうとをきよろひの袖
を ○ひたしいて―(内・毛・松・藤・慶) かたしいて、(打) か
たしき

35ウ ○承はると申て蒔絵の盤に―(内・毛・打) 兼房うけたまはる
と申てなかへの銚子、(松・藤・慶) 承ると申て長柄のてうし
○すゑて出―(内・毛・打・松・藤) ナシ、(慶) すへて ○二世
まてを―(慶) 二世までのさかづきを ○たぶ／＼と引へ―(他
本) 三度いたゝきたふ／＼とうけ

36オ ○承と申て―(内・毛・打・松・藤) かねふさうけたまはると
申て、(慶) 兼房 ○こゑの―(内・毛・打・松・藤) ナシ ○い
かさま―(慶) ナシ ○大剛一の兵者の―(他本) 大剛の者の
○弁慶は腹をきれ兼房はふせき矢いよ―(慶) 兼房はふせき矢る
よ弁慶ははらをきれ

36ウ ○ちからにし―(内・毛・打・松・藤) 力にし大庭におり、
(慶) ちからにし大庭におどりおり ○長刀にすかつて―(慶)

長刀をつえにつゐて ○余りの忝さに―(内・毛・打・松・藤)
うけたまはり、(慶) うけたまはつて

37ウ ○きらんとする―(内・毛・打) うたんとする ○武蔵にあた
るその矢はあしをたはねてまきの板戸をつく風情―(慶) ナシ
○かゝりける処に―(慶) ナシ ○申けるは―(毛) これを見て
○いかにかた／＼―(慶) ナシ ○いはれ―(内・打) ならひ
○ちかふよつて―(他本) ナシ

38オ ○手もとへよるものなかりけり―(内・毛・打・松・藤) おぢ
てそふなくちかつかす ○沼楯このよし見るよりも―(他本) ぬ
またてのしやうしか是をみて ○いふまゝに―(内・毛・打・松
・藤) とて

38ウ ○うきぬしつみぬなかれて―(打) うきぬしつみぬなかれて
「そののみくつとなりけり」ト傍書

